

〔藻鹽草十〕鶴

名所あさかの沼、鹽かまの浦、伏見田、高瀬のよど、深草の里、かたのくろと山の原、あのさゝ原、是等よめり、

玄ぎのたつ澤 鶴のふす 鶴のゐる 鶴のはねがきもいかくと云曉の事也、しげきことによいひしきと云り、朝

鶴のふしど田也 のたの草ねにふす鶴 羽わびしきそへてよ 鶴がはねをとおもしろき 門田の鶴かり小田の玉しのしがのうはげにふる

〔東雅十七〕鶴シギ 舊事紀に鶴山祇神といふ見えしを古事記には志藝山津見神に作り、日本紀には舊事によりて鶴此にシギといふと註せられけり、又神武天皇、大倭兔田之兄猾ウタノヒカシを斬給ひて、御軍を勞饗し給ひし時の御歌にも、此鳥の事をばよみ給ひたりけり、倭名抄に玉篇を引て、鶴は野鳥也、漢語抄に抄シギ、一に田鳥といふと註したり、後俗田に從ひ鳥に從ふ、字創造りて、讀てシギといふは楊氏の説によれるなり、シギの義不詳、萬葉集抄に、古語にシギと云ひしは繁しといふ詞なりと云ひけり、舊事紀に鶴山と見えしも、後にシゲヤマといふが如くに、其木立の繁きを云ひしを鶴の字を借用ひて玄るされたるなり、されど又是に因りて、鶴こゝにシギと名づけしば、繁の義ありとも知られたるなり、舊説に古歌にシギのはねがきも、はかくといふは曉の事なり、玄げきことによむも見えたり

〔草〕藻鹽 さらばシギとは、其羽音の繁きに因れるにぞあるべき、爾雅に鶴は鶴母といふ註に、鶴也と見え、正字通に、鶴は鶴屬也、說文本作鶴、俗作鶴非と見えたれど、其形の如き詳ならず、或入陳藏器本草によりて、鶴をもてシギとす、其説の如きは鶴似鶴色蒼觜長在泥塗間、作鶴々聲、亦鶴鶴類也と見えけり、其形狀は似たる所なきにあらず、舜水朱氏、此にいふシギは本國にも甚だ多し、されど其名をば知らず、鶴は海上にある鳥なりと云ひしなり、通雅には、古傳に見えし鶴冠の鶴は、海上にある物、爾雅に翠鶴といふ是也、說文に見えし知兩の鶴は、李時珍が田鳥の小者といふ、蘇秦が鶴蚌といひし是也と見えたり、是等の外また廣雅に鶴屬に鶴子見えたり、さらば鶴といふもの、一名にして三物ありけり、舜水執一之説、必より隨ふてシギといふが如きは、いまだ其據を、鶴讀

〔本朝食鑑〕鳴者鶴也、陳藏器曰、鶴如鶴色蒼觜長、在泥塗間作鶴鶴聲、村民云、田鶴所化、亦鶴鶴類也、是則本邦之

華和異同、鳴